

ライラさんは将棋アイドルになります 6

「世界をつかむための言語、それはエスペラント！」
「いずれ我が魂も天界へ届くであろう！ 魔力が満ちるまで……闇に飲まれよ！」

長身でエキゾチックな雰囲気的美女と、銀髪でゴシック調の衣装をまとった少女がスタジオの中で叫んでいた。三東と月子さんは口をあんぐりしながらそれを眺めていた。

「いかがですか」

会社社長、^{こうやま}甲山は胸を張っていた。

「なんというか、ええと」

収録は終わったらしく、二人の女性は高笑いしながらスタジオを去っていく。

「あの……び、びっくりしました……」

二人が見ていたのは、「アイドルと楽しむエスペラント語」というネット番組である。二人のアイドルがよくわからない日本語を使いながらエスペラント語を学ぶという、摩訶不思議なものだった。

「私たちが提唱する『第二の教育テレビ』は、何でも

あり感を前面に出しているわけですよ。教育テレビのいいところは模倣しながら、地上波ではできないことをやる。これは今までありそうでなかったコンテンツだと自負していますよ、はっはっは」

「ううむ……」

「ケーブルやネットでコンテンツは増えています。でも、気づいたんですよ。結局、教育テレビが一番落ち着くって。みんな、特に興味がなくても、思わず見てしまうわけです。だから、特定の興味じゃなくて、広く浅く、『なんとなくおかしくて、興味がわくもの』を提供していきたいわけです」

社長の鼻息は荒い。三東も社長だが、勢いが全く違う。

「そこで……僕たちですか」

「そう。将棋はすでにいくつものネットチャンネルがある。でも、みんなきちんとしすぎです。あなたたちの個性で、もっと自由でおかしなものができると思うんですよ」

「私たちの……個性……」

「そう。特に、ライラちゃんはいいいねえ。ドバイ出身、かわいくて面白くて、これまでにないキャラクターだ。『アラビア語で将棋』これはいけますよ！」

「うーん……そうかなあ……」

首をひねりながらも、三東の腹は決まりつつあった。
何かがやってきたときは、受け入れてみるのが吉。彼は、そういう人生を歩んできたのである。

「あの……変なこと頼んで……ごめんなさい」

「そんなかしこまらないでよ。全然いいから」

月子さんは、金髪の女性に頭を下げていた。月子さんより少し背が高く、目鼻たちのはっきりした美女である。

「でもなあ、小さいのがいいのよね」

「その……私ならちょうどいいんだけど……昔の服となくて……」

「高校生の頃のあるかなあ」

クローゼットでごそごと服をあさる彼女の名前は、皆川^{もとみ}許心という。若手女流棋士であり、月子さんの研究会仲間である。

「あっ……でもこれはなあ」

「それ……制服……？」

許心が手にしているのは、青いブレザーだった。今

の彼女はスタイルがいいので、着れそうにない。ちなみに月子さんには着れそうである。

「なんとなく、とってたのよね」

「そうか……そうですね、高校行ってたんですよね……」

「あ、金本さんは行ってないんだっけ」

「はい……」

「着てみる？」

「えっ、そんな、私は……」

「いいじゃんいいじゃん」

「あ……じゃあ……ちょっとだけ」

この後ライラさんが着ることになる制服だが、実はその前に月子さんがちょっとだけ着てみたのであった。

「なんかロックな気分になってきたでございませうねー」

トントントー、と音が鳴る。制服を着たライラさんは、ペットボトルを箸でたたいていた。

「あ……とっても上手になりましたね……」

ほたるが、ロフトから顔を出す。律儀に正座しながら

ら学校の宿題をしているところだった。

「ライラさん、ドラムどんどん好きになってきましたです」

「ライラさんは……将棋も頑張っているし……すごいです……」

「ほたる殿も頑張っているでございますよー」

「私は……まだまだです……」

「ライラさんも、まだまだ頑張ってお家賃稼がないといけませんですねー」

トントントー、は、もうしばらく続いた。

深夜のカフェ。三東の前には、マントを着た青年がいた。

「見ましたよ、あれ」

「『アラビア語で将棋』かな？」

「はい。一部棋士の間で話題沸騰です。全く分からないアラビア語、マイクなしでも響き渡る大声、おどおどする二人、落ちてくる植木鉢。全く将棋のことが頭に入ってきません」

「はは……」

「でも、面白いです。多分、出ている四人が面白いか

ら」

小指を立てながら、青年はカプチーノをすすった。

「運よくね、そこそこの視聴者数らしい」

「どうも、講座の人たちにも届いたみたいですよ」

青年、辻村六段は不敵な笑みを浮かべた。

「『かりんチャレンジ』の？」

「はい。いろいろと申し込みはあるらしいんですけど、アイドル同士で団体戦出来たら面白いねもと話して
ます」

「……ぜひ」

三東は、ぎゅっとこぶしを握った。

その時、三東のポケットの中でスマートフォンが震えた。

「あ、ちょっといいかな……はい、月子さんはどうしたの」

いい報告ができそうでちょうどいい、三東はそんなことを考えていた。けれども、月子さんの声いつもより低く、いつもよりさらにゆっくりだった。

「……あの……ら、ライラさんが……またバイトを…
…クビになったって……」

ライラさんは事務所に入ってから、バイトを続けていた。まだアイドルとしての仕事は少なく、310プ

ロからの給料だけでは暮らしていけないのである。

「そうか。彼女はどうしてる」

「……気丈に……ふるまってますけど……」

「わかった。すぐ戻る。こめん、辻村君、行かなくちゃ」

「はい。もちろん、そうしてください」

三東は、カフェを飛び出した。